

姫路顕栄教会

エピファニー・タイムス

【住所】〒671-1152 姫路市広畑区小松町4-36

編集責任者 牧師・司祭 ミカエル小南 晃

「見失った羊」のたとえ

「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。」

(ルカによる福音書 15:4)

冒頭の聖句は「迷子の羊」として良く知られた譬え話です。新共同訳聖書では「『見失った羊』の譬え」と小見出しが付いています。この譬え話は神を離れ、失われてしまった者、即ち罪人に対する神の愛、神の忍耐をとても分かりやすく、それこそ子どもにでも分かるように説いています。

しかしこの譬え話しが教えようとしていることは、それが実際の場面となると、即ち九十九匹を野においてでも1匹の羊を探し求めるべきかというような状況が現実の社会で起こるならば、これ程受け入れることが難しいこともないのではと思います。

今、子どもにでも分かるようにと申しましたが、むしろ『子どもだから分かる』と言い換えたほうが良いかも知れません。

子どもにとって迷子になってしまう心細さは非常に深刻な体験です。ですからこの譬え話を聞くとき、たいていの子どもにとって、無条件に自分自身を迷子になっている羊に重ねて聞くことでしょう。小さな子どもで、「では野におかれた九十九匹の羊はどうなるのか」と疑問を投げかける子どもはまずいないと思います。

この譬え話を聞いた時に、その意図は、

罪人に対して、どこまでも忍耐強く悔い改めを待ち続けておられる神の慈悲深さを語ろうとしていると頭で理解するだけでなく、子どもがこの話を聞いて、心からの喜びを感じるようにこの話を受け止めた時にこそ本当に分ったことになると言えるでしょう。

迷子の羊としての自分

この譬え話が語られた時の状況は、「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。するとファリサイ派の人々や律法学者たちは『この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている』と不平を言い出した(ルカ15:1)」とあります。

ファリサイ派の人々や律法学者たちは、自分たちは正しいと自認し、罪人たちを見下げ、交わりすら断つことが正しいとしていました。その人々に対して、イエスはこの譬えを語られたのでした。

イエスはさらに「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある』と語られました。悔い改める必要のない正しい人とは誰のことでしょうか。本当は全ての人が悔い改めて神に立ち帰るべき筈です。

この馴染み深い「見失った羊」の譬えから、自分は迷子になっていた羊としてこの譬えを聞くか、それとも「悔い改める必要の無い正しい人」として聞き、「では野におかれた九十九匹の羊はどうなるのか」と疑問を抱いているのか、自分自身を振り返って見たいと思います。